

横浜市教育プランの開発

清田正男 榎原徳夫 杉千賀子 箭内昭夫 渋谷英 太田武 青木和雄
 〈教育委員会事務局学校教育教育部指導課指導主事〉

一 ことごの起り

科学技術の進歩や産業経済の高度成長は、国民生活を豊かで多様なものとした反面、多くの問題や矛盾を生み出してきた。横浜市においては、特に都市化・過密化現象が著しく、それによって自然破壊・公害等深刻な問題をかかえている。このような環境破壊は、子どもたちからいきいきとした活動する場を奪い、いわゆる「遊べない子ども」すら生み出すに至っている。このことは、現代の管理社会化現象とあいまって、地域・家庭の中で子どもたちを孤立化させ、その相互連帯感の育成を阻害するようになった。

このような環境条件に加えて、学校教育においても、高度の科学技術の進歩に即応すべきであるとの要請から、子どもたちの学習内容は質量ともにもますます過密となり、さらにはわが国の宿命ともいわれる学歴偏重主義に基く受験競争にもいっそうの拍車がかけられ、子どもたちは盛りだくさんの学習内容を受動的に受

け入れることが精一杯で、学習への喜びもゆとりも失われがちになってきた。

このような状況は自主的創造的な人間育成という教育本来の目的に対する重大な障害であり、その打開は本市教育の焦点の課題となった。

そこで本市教育委員会は、改めて学校教育のあり方を問い直し、その具体的な改善を図るために、昭和四十七年から「横浜市教育内容・方法開発」（通称「横浜プラン」）の事業に着手し、以後五年にわたって、延べ千余名の市立小・中・高校の先生方、七十校の研究協力校の協力のもとに、鋭意研究・実践検討を積み重ねて来たのである。

なお、この開発に当たっては、つねに次の四点に留意した。

- ① 子どもの立場に立って発想すること
- ② 学校教育の実践的な立場を尊重すること
- ③ 多くの人々の協力を得るようになること
- ④ 地域に即した地方化に重点をおくこと

と

二 基本方針と研究内容

横浜市教育内容・方法開発とは、横浜市の学校で、子どもたちが「ゆとり」をもっていき／＼と自分から進んで学習し、ほんとうに生きて働らく力を身につけていくためには、どのように教育内容や方法を改善すべきかを策定しようとする計画である。換言すれば、生涯を通して自ら学び、自らを創造しつつ絶えず自己形成していくことができるような、子どもの育成を志向する教育計画の策定である。

そこで、われわれはまず、開発のねらいを、

- ① 向上の意欲をもつ子ども
 - ② 基礎的な力を身につける子ども
 - ③ 学び方を身につける子ども
- の育成というようにイメージ化し、そのための方策として、
- ① 意欲的に学習し、基礎的な力を身に

つけ、創造的、発展的に学べるような学習内容の精選を図る。

② 充実感をもって学び、連帯感も深まるような学習の場を工夫する。

③ ゆとりをもった学習ができるように、授業時数や学習時間を弾力的に運用する。

ということを基本方針とした。

この基本方針に基いて、具体的に、研究・検討された開発内容の概要は次のとおりである。

① 学習内容の精選

各教科・領域の目標と内容に、いっそうのつながりとまとまりをもたせて学習内容の精選をはかった。

② 学習方法の開発

- 統合と関連による場の工夫
- ・ 合科的扱い
- ・ 道徳と特別活動の関連的扱い
- 個を生かす場の工夫
- ・ 課題学習

・クラブ活動

・教育機器・図書資料の活用

・知的発達に遅滞のある子どもの学習

○時間運用の工夫

・単位時間の柔軟な扱い

次に、これらの研究・検討内容の若干について説明し、さらに研究協力校の実践例を紹介しよう。

三 学習内容の精選

横浜プランは、「自ら学ぶことのできる子ども」の育成を図るものであるが、そのためには学習指導においても、従来の解説型・注入型の授業を、追求型・探究型の学習に転換させることが第一に必要である。つまり、子どもに言語的知識の結論を提示し、記憶させるやり方では、「自ら学ぶことのできる子ども」は育たない。子どもが問題を持ち、考え、子ども自身が知識を獲得するという学習過程こそ大切にならなければならないという考えである。

しかし、このためには多くの時間の用意が必要となってくる。「自ら学ぶ」学習の成立を重視し、限られた時間の中で、これを行おうとすれば、もりだくさんの教育内容を精選することがなによりも急務となってくる。

① 内容精選の考え方

教育内容を少なくする最も安易な方法は、あまり重要でないと思われる内容を削減することである。このように教材を無原則に切つて捨て、単に量だけを減らすことは「精選」ではなからう。

教育内容の精選とは、その教材の学習によって得られた知識や能力が、他の多くの教材の学習を容易にしたり、他の問題解決に生きて働く力をつけることができるような教材を選定していくことである。換言すれば、有機的な連続をもつて、拡大発展する学習を可能にするように教育内容を構造化し再構成することである。いわば教科や領域の土台にあたるような内容を選び出し、構造化することが内容精選であるといえよう。

また、「自ら学ぶ」ことを支える意味からすれば、子どもの発達段階にふさわしい教材の選定という視点も不可欠である。

② 内容精選の進め方

前項のような考え方から、横浜プランでは次のように精選を進めた。

⑦ 各教材、道徳、特別活動の本質と目標を明らかにする。

⑧ 教科や領域の基本的性格や固有の学び方を、それぞれの教科や領域の特性として捉え本質を「明ら」かに

する。

⑨ 本質から各教科等が最も基本とするねらいを導き出し、これを分析・構造化して「基本目標」をとらえる。

⑩ 指導要領・本市教育課程に示してある内容を、本質・基本目標を視点として吟味し、目標の系列を追いながら捉えなおす。

右の⑦、⑧は教科構造から、その教科の基本的な内容を捉えようとする作業であり、これによって次のような内容を導き出そうとした。

① 基本的に系統的な内容

小学校社会科を例にとれば、他の知識とつながりをもたない断片的な知識を網羅的に示すのではなく、個々の知識をたばねる概念——社会の基本的傾向性・法則性及びその社会の目ざす理念等——を右の方法で選択し、系統的・基本的内容とした。

これらの概念を基本的な内容としておさえることによって、これらの概念を発見・把握するのに適切な社会的事実、事象だけを選定すれば、具体的な教材精選も容易にできるわけである。

② 転移力をつける教材

これは、社会科の場合、子どもたちが学習によって発見・獲得した概念を他に適用し、より確かな生きて働く知識を構成するために適切な社会事象を教材とし

て選択することである。

③ 学び方を学び得る教材

④ 意欲を持って取りくめる教材

前述したような、基本的な概念が明らかになっていれば、それを含んでいる事実事象は、それだけでも良い教材となり得るわけであるが、横浜プランでは、さらにそれが子どもにとって興味や関心のあるものであるか、具体的に操作し得るものであるか、子どもの思考を刺激するものであるか、などのフィルターを通して、より適切な教材を選定するように努力した。

⑤ 各教材・道徳・特別活動の本質に対する取り組みの特性から内容を捉え直す

「本質に対する取り組みの特性」とは、その教科等についての子どもそれぞれが発達段階における認識の仕方、思考の仕方、感じ方、創造性などの一般的傾向である。これを学年別に明らかにし、それに対応するように内容の再構成をはかった。これによって、子どもが確かに把握できる内容、意欲を持って取りくみ、学び方が学べる内容が選定できたわけである。

この本質に対する取り組みの特性から内容の再構成は、横浜プランの大きな特色になっていると言つてよからう。

四——学習方法の開発

精選された内容は、それにふさわしい方法に支えられてはじめて子どもものものになると考えられる。これまでも教科等において、それぞれ適切な方法が工夫されてきた。

ここでは、「自ら学ぶことができる子ども」の立場から、より効果的な場を工夫し、それに即した方法の開発を試み、実践を行ったものである。

① 統合と関連による場の工夫

いままでの学習内容を吟味すると、同じようなものの重複や相互に関連をもっているものがいくつかの教科等に分散されて学ぶようになっていく。そこで、

- ・ むだな重複はさけて必要な重複をくりかえすこと
- ・ 有効な経験をひとつのくりかえすこと

を主眼において、子どもの興味・関心が深まり、充足感のある学習ができるよう場の設定を行ったのである。

〈各科的指導を求めて〉

小学校低学年の授業に触れると、そこでの子どもは自分の経験をもとに気づいたことを発表したりして、その時間の教科等の枠にはおさまりにくい多様な問いと答えが飛び出してくる。

このような状況をふまえ、子どもに身近かな生活上の問題を中心に、社会・理科・道徳・特別活動の内容を統合して扱うようにした。

低学年の子どもは、遊ぶことの中で人間関係を学びとったり、ものの性質を知ったり、作りあげることの喜びを味わったりする。

そこで、子どもの実態にあった主題の抽出と内容の構成を行い、その扱ひ方の工夫を行った。

たとえば、自然にかかわる学習課題の中には「きれいな花だん」「かっている動物」など飼育栽培を通し、観察を主としたものもある。

ここでの子どもの活動は①具体的であること、②体験的であること、③自発的であることを重視して場の設定を行い、意欲にそった学習の展開をはかったのである。

② 個を生かす場の工夫

ふつう、子どもの学習は学級を単位として行われているが、ともすると、ひとりひとりの子どもが集団の中に埋没してしまう心配がつきまとう。そこで、

- ・ 子どもが思いきり自分のやりたいことがやれる
- ・ 機器や資料を活用して、頭だけでなく身体で「学び方」が学べる

場を設定し、自信をもって積極的に活動できるようにした。

〈課題学習のあり方をさぐる〉

いままでの教科の枠の中だけでの学習では、子どもの求知心や向上心を満たしきれない場合がある。そこで、自分の課題を自分の計画や方法で追究し、集中的継続的に学べるような場の設定を行った。

ここでは、子どもの活動は次のような特徴をもつと考えられる。

- ・ 自分でやりたいことがみつけれられ、やり方を考えようとする
- ・ できるだけ自分の力で学習しようとする
- ・ 互いに協力して学習しようとする

学習の進め方の見通しを立てられる課題学習で子どもが選ぶ課題は多様であるが、活動を軸に考えると次のようになる。

- ① 見学や調査、② 飼育や栽培・採集、③ 製作、④ 創作や読書など

この課題学習では、先生の援助やはげましのもとに、子どもの発見や創意が深められ、このような態度は、他の教科を学習するときの支えになると思われる。

③ 時間の運用の工夫

以上の学習内容の精選や学習の場を工夫は、それらを扱う授業時間と深い関係

がある。

〈単位時間の柔軟な扱い〉

学習の単位時間は、小学校では四十分ないし四十五分で行われている。しかし、このように一律な時間に内容をもり込む方式では、実践上、時間の過不足を生じ、子どもの意欲を阻害しやすい傾向にある。

そこで、時間に基本単位を定めて、その長・短の組合せを考え、内容に合った学習を行い、子どもの意欲の継続をはかろうとしたのである。このような例として、六十分ないし九十分は作業や調査・実験実習にあてたり、短い時間の二十分などは、漢字や計算練習にあてたりしている。

これらは、子どもが「ゆとりと充実」をもって学習できるための試みといえる。

事例1

児童自らの手で切り開き自らの力で創造する「葛野の時間」を求めて

横浜市立葛野小学校

「創意ある教育活動」の具体例として、葛野小学校の研究実践「葛野の時間」を紹介する。

この「葛野の時間」でねらうものは、

子どもたちが、時のたつのも忘れて夢中になって主体的に打ち込む躍動する生活をさせることを通して、既有的知識経験を総動員させ、直観力・判断力、さらに困難や新しいことにたち向かう意欲、なしとげたことからくる自信・新しいことに適切にたち向かう力—を育てることにある。さらに学年を中心とした集団活動を軸に、連帯意識をたかめ、協調性・友情を育て得る生活をさせる中で、ひとりひとりが生き生きとして自らを失わず、

活動時間は、全校児童が毎週土曜日、二時間を「葛野の時間」として活動して

領域	ね	ら	い	活動例
①作る	・作り出す意欲と技能 ・静かに鑑賞し、すぐれたものを吸収しようとする態度 ・協力して作業する態度			お話作り 紙芝居作り 絵画・工作・手芸・作曲 人形劇
②働く	・働くことの喜びを味わわせる ・社会性を育てる			環境美化・飼育・園芸 卒業期奉仕
③きたえる	・最後までやりぬく心 ・たのしく協力 ・明るくあたたかい心 ・強健な身体づくり			スポーツテスト 駅伝大会 球技大会
④楽しむ	・自主性、創意工夫 ・なかまを大事に ・生き生きした子ども			竹とんぼ、たこ作り 石けり
⑤調べる	・自主的、追求的な態度 ・思考力、行動力 ・創造的、計画的な態度			郷土調べ・実験・観察 文芸的なもの

他の主張や行動を認め合おうとする集団参加の態度を育てることもねらっている。

これらのねらいを達成するために、作る、働く、きたえる、楽しむ、調べるの五つの領域を設定し、それらの領域を組み合わせることで主題を構成している。つぎに領域のねらいと活動例を示そう。

活動時間は、全校児童が毎週土曜日、二時間を「葛野の時間」として活動して

※例1 1 たんけんごっこ 一年（領域1・2）

（ねらい）グループで校舎内を巡り、いろいろな教室を調べて床地図に表現し、協力して行動する態度を養う。

（活動）調べる教室や約束を話し合った後、四人グループごとに「おとうさん、おかあさん、子ども」の役割を決め、それぞれ思い思いの方向へ出発。四十分後、教室にもどり、グループごとの記録をもとに教室の大床地図結果を記入。この活動は、当初教師が抱いていた「野放し」にすることへの不安がふつとび、子ども達は「おとうさん」を中心に、チームワークよく、みごとに生き生きと活動し、各教室の位置関係及びそこに生活する人たちのようす等も主体的に把握してきた。

※例2 2 学校をきれいに 三年（領域1・2）

（ねらい）みんなが使用するところを美しく飾ったり、ごみ箱を作ったりして、校舎内外の環境美化に関心をもちたせるとともに、創意工夫する態度を養う。

（活動）グループごとに、何を作り、どこに飾るかを計画し、仕事の分担と手順を決め、作業にはいった。完成した作品は、学年の廊下に展示され、相互に評価

し合った後に予定した場所に配置された。

思い思いの材料、アイデアによるさまざまな形のごみ箱、花びん、落し物入れ、ステッカーが作られ、環境美化への関心もたかまった。

※例3 3 緑をふやそう 五年（領域2・5）

（ねらい）学年花壇を計画的に栽培する活動を通して、植物を大切にす心、美しさへの関心、働くことの喜びを味わわせる。

（活動）主題についてのオリエンテーションの中で、①整地係、②苗床係、③栽培ごよみ係の三グループがつくられ、学年内で、学級の枠をはずした構成が行われた。

整地係は花壇の土の入れかえ、整地・花壇作り、苗の移植を行い、苗床係は、苗床を作り、種をまき、移植などを行

い、栽培ごよみ係は、年間栽培ごよみの作成、植物ごとの栽培表を作成した。

生まれてはじめて、鍬を握り、額に汗して耕す子、育てた苗を大切に運ぶ子、凶鑑と首つびきで栽培ごよみを作る子、それぞれに仕事は違っても、共通の課題に取り組んだ意欲ある活動であった。

事例 2

作る楽しさ、できた喜びを味わい
やりぬく心を育てる教育を求めて

横浜市立大曽根小学校

本校では、児童が自ら課題をもち、計画をたてて実践し、解決していく態度の育成を願っている。そこで、「つくる楽しさ、できた喜びを味わい、やりぬく心を育てる」をあいことばに、教師と児童がプランナーとしての自覚をもち、学校生活を教師と児童がつくりあげていく教育を実践している。

① 感動のある授業を通して体育の技能を向上させ、体力を養う指導

子どもひとりひとりが課題をもち、それを解決するために自ら考えたり、友と協力したり、教師にたずねたりしながらそれが解決できたとき、大きな満足感、成功感を持つにちがいない。この満足感、成功感が自信となり、次の課題に向う原動力となる。これらをもとにして技能や体力の向上をめざし、

② 子どもの興味を満足させ、運動しよ
うとする意欲を喚起させるための指
導法ならびに学習のあり方

④ 運動の特性を考えながら児童の発達

段階にあった内容を学習させ、児童
自身くふうして学習できる場や条件
の与え方

というテーマで、意欲的な子どもの学習
展開を試みている。

② 学校生活の中で自己をみつめ実践する子の育成

日常生活の中で自己をみつめ、のぞましい生活態度の育成をはかり、生活の節となる日をつくるために生活目標を設定した。これは特に道徳、特活(学級指導)との関連を重視し、道徳の時間で意識をほりおこし深めたものを学級指導の中で実践するのである。生活目標を通して自己をみつめる場合は各学期ごとに、各月の中で、そして各週の中で実践する。

とくに週目標では自己をみつめると同時に集団への所属感を深めさせるため、児童の委員会活動による節づくりを重視し、各委員会が課題をもち、それを全校に呼びかけ実践する。

また各学年ではそれぞれ生活ノートを作成し、自分を見つめ、はげまし、喜びを味わわせている。四年では「じゅっさい」、五年は「いれぶん」、六年は「葦の葉」などである。

③ 豊かな心を育て充実した学校生活

⑦ 学年学級的时间

低学年では月二時間、高学年では月三時間の学年学級的时间がある。その時間では学級単位で、おみこしづくり、紙しばい、オペレッタづくりなど教師の個性を生かした指導がなされ、運動会やクリスマス大会などをつかって発表し、より楽しい充実した学校生活をおくっている。たとえば、おみこしづくりでは、学級全体でどんなおみこしを作るか相談し、各個人の分担を明らかにし、集団と自分との連帯感をもたせる。そして、その製作の過程において子どもの「よさ」の発見につとめる。

④ 一人一鉢

自然への畏敬の念を育て、やりとげる大事さ、草花を育てることをねらいとして、一人が一鉢ずつ草花を育てている。なお、その活動を通して、児童の草花の観察力の発達段階も調べている。本年度扱っている花は、一年生はあさがお、二年生から六年生までは、一組はアスタ、二組はベチユニア、三組はおじぎ草、四組はアフリカほうせん花。

⑤ 豆博士

児童が日常疑問や関心を持っていて、柄を六月頃に課題化し、解決の計画を立て、調査したり資料を集めたりして、夏休みに一応のまとめをし、九月初めに各学級で豆博士の発表会をもつ(父母も参加)。教師は児童個々の発想を大事にし

て、児童が成就感を味わえるように助言をし、発表会での成功にひたらせる。

⑥ 大曾根かるた

児童会の運営委員会が中心になり、年度内にあった学校行事や学校生活で印象にのこったことを「いるはがるた」にし、全児童の投票により、大曾根かるたの決定版をつくる。かるたづくりは、四月初めに計画し、日記記録しておき、冬休みの中からよいものに絵をつけ、一組に仕上げる。昨年度、この決定版が卒業生によって板に彫られ、記念品としてこされている。兄弟をはじめ両親や教師もかるたづくりに挑戦する楽しさがあり、全校が一つのことにとりくむよさがある。

⑦ 「大曾根の歴史」

学習資料「大曾根の歴史」を作り、それを使って次の活動をした。

・ 社会科・郷土学習での利用(三、四年)

・ 郷土史クラブでは町の歴史をさらに深く、郷土愛を育てる

・ 読書時間に読み物として活用し、伝説や民話に親しみをもちさせる

・ 学年学級の時間等を利用して、伝説を劇化したり、学校の歴史を版画にするなどの活動を通して、郷土の地理的・歴史的な理解を深める

五 今後の展望

本市では、これまで教育内容・方法の具体化、実践化を推進してきた。研究協力校をはじめ各学校で教育計画を工夫して成果をあげている。この成果をもとにして、いま、本市教育課程の改訂について検討をすすめている。

本市では教育課程編成にあたって教育実践者の手づくりのすばらしさを大切にしてきた歴史がある。今回の改訂においても、本市教職員三百余名を委員に委嘱し、二七部会の委員会を組織して研究協議を重ね、横浜プランと新指導要領との接点を求め、本市に即した教育課程を編成する。

このように横浜プランは本市の教職員が英知を結集し、永い年月をかけて生み出したものである。その成果をふまえて新指導要領をみると、そこには数多くの共通点を見出すことができる。換言すれば横浜プランは新しい教育の方向を示唆しているものといえよう。

このような考えから、これからの志向

しつつ新指導要領を主体的に受けとめ、横浜プランの精神を生かした教育が、本市の全市立学校で行われるようになってこそ、望ましい横浜市民育成を目指した新しい教育が行われているといえるのではなからうか。